

TLRリガンドによる喉頭粘膜由来線維芽細胞からのTSLP産生とその制御

福井大学耳鼻咽喉科

山田 武千代、齋藤寛、木村有一、窪 誠太、山本英之、坂下雅文、藤枝 重治

アレルギー性鼻炎や気管支喘息などは気道全体をアレルギー疾患の標的臓器として考えるべきであるとして、one airway one diseaseの概念が提唱されているが、喉頭アレルギー、咳喘息、アトピー咳嗽も同様である。「鼻閉」が生じると口呼吸となり喉頭や下気道に直接影響を与える。気道として下甲介粘膜や気管支粘膜に関する研究はなされているが、気道喉頭粘膜に関する研究はあまり行われていない。気道喉頭において免疫機能が強いとされているのは披裂部であり、サイトカイン産生や気道リモデリングにも関与する線維芽細胞に着目し、喉頭披裂部粘膜由来線維芽細胞を用いて実験を行った。皮膚のケラチノサイトや気道上皮などから産生されるTSLP (thymic stromal lymphopoietin) により活性化した樹状細胞が、allo naive CD4+T 細胞を、IL-4/IL-13/TNF- α 産生(炎症性)Th2 細胞に誘導することによりアレルギー反応が惹起されることが示されている。喉頭披裂部粘膜由来線維芽細胞を用いた検討では、TSLP産生はTLRリガンドやサイトカインにより誘導された。今回は喉頭披裂部粘膜由来線維芽細胞からのTSLP産生の制御について報告する。